

セルリー産地の50年を振り返って

■ 観音寺地区セルリー一部会 ■

(西讃農業改良普及センター 真鍋 尚)

●対象の概要

管内のセルリー生産は、昭和45年頃から観音寺市有明地区で始まり、現在、22名の生産者が約9haで栽培しており、年間生産量700tが12～5月にかけて関東方面へ出荷されている。

令和元年11月に観音寺セルリー生産50周年記念大会を開催し、一つの節目として、さらなる高品質生産や安心安全対策の強化に努め、農家所得の向上を誓ったところである。

●課題を取り上げた理由

セルリー栽培が50年を経過し、今まで、育苗・品種・病害虫などの様々な課題に産地が取り組んできており、現在では安定した生産量を誇っており、それに対して普及センターが取り組んできた内容について整理し、どのように課題解決を図ってきたか、あしあとを残す。

●普及活動の経過

1 セルリー導入に当たっての取り組み

セルリー導入に当たって、施設園芸を導入したい8名が品目を模索する中、高知県への視察先の紹介や品目の選定について検討会を開催した。

2 導入当初時の育苗を重点指導

セルリーは、高温時の発芽が難しく、育苗培土の検討や播種時期の温度管理など試行錯誤を繰り返した。発芽後の移植は地床でのズラシ栽培、ポットの利用、25穴パックの検討を行った。

3 昭和50年にウイルス病が多発、原因を究明

昭和50年に原因不明の茎にえそ症状が見られ、農業試験場や国の四国農業試験場と連携し原因の追究を行った。

4 事業活用による面積拡大と堆肥舎の建設

昭和51年に施設野菜合理化推進モデル事業による17棟、1.4haの栽培温室の導入を支援した。これにともない、堆肥の需要が高まったことから昭和53年に有明堆肥利用組合を立ち上げ、堆肥舎の導入を支援した。その後も、規模

拡大や新規者の導入に合わせ栽培温室の導入を支援し産地の拡大を図った。

5 ミニセルリー「トップセラー」の導入支援
従来の「コーネル619」と合わせて1株当たり1kg程度で収穫が可能なミニセルリーを昭和52年に導入し、それに伴い、農業試験場と連携し、栽植密度や施肥量、大型トンネル栽培の検討を行った。

6 施肥改善への取り組み支援

セルリーの導入面積の拡大に伴い、地区内のかん水用井戸水の肥料濃度が高まり、環境保全の立場から改善が求められた。それらを解決するため、有明畑作振興協議会を立ち上げ、緩効性肥料主体とした施肥改善の実証ほを設置し、改善を図った。

7 養液土耕栽培の実証

施肥改善への取り組みとは別に平成5年から養液土耕栽培の実証ほを設置を支援した。専門指導員やメーカーと連携しながらマニュアルの作成を行った。

8 自然災害への対応、復旧支援

平成16年の台風16号による高潮により産地の約4割の農地に海水が浸水した。早急に復旧対策会議を開催し、土壌分析や井戸水の調査を行い、ほ場の改善に努めた。

9 高温による苗の異常、地元での採種支援

平成20年頃から育苗センターで苗に異常株の発生(葉が巻き込んだ状態)が見られた。高温時に多いことから、地元での採種を考え、香川大学と連携し、種子の選抜を行った。



セルリー苗の異常株

●普及活動の成果

1 育苗技術の確立

導入当時は、種子の発芽が上手くいかなかったが、発芽時の温度管理や育苗培土の改善に努めたことにより、育苗ポットでの育苗が定着した。しかし、高温になると種子の発芽が一定しないことから、育苗センターで発芽苗の試験を行い、生産者が発芽苗を購入するようになった。また、128穴のセルトレイでの育苗を検討し、育苗センターで苗の供給が可能になったことで、生産者は育苗を全量委託できるようになり、生産者の育苗負担はなくなった。しかし、平成20年頃に育苗センターで、苗の生育障害が見られ始めたことと、発芽率の低下を受け、種子の系統選抜と長野県で採種の研修を行い、地元での採種体系を確立したことにより、問題解決を図った。



セルリー採種（収穫1週間前）

2 施肥改善と養液土耕栽培の普及

セルリーは、肥料の投入量が多く、10a当たり窒素成分で当初90kgを超えていた。セルリー導入から15年経過した頃、灌水に使用している井戸水の硝酸態窒素濃度が高くなり、改善が求められたことから、平成3年から7年間、施肥改善の実証ほかに取組み、緩効性肥料を使った施肥体系の確立を図った（従来の設計から窒素成分を40kg/10a削減）。

養液土耕栽培のシステムの導入は、全国に先駆け、当地区で実証試験が行われた。その結果このシステムを利用することによってセルリー3割増収、5割の減肥、4割の節水が可能となった。それにより、平成10年には、1.2haの養液土耕施設が導入され、現在では、3.6ha（全体の58%）に広がっている。

3 病害虫防除の対応（防除体系の確立）

導入当初、冬場に原因不明の茎のえそ症状の



養液土耕栽培のセルリー（揃いが良い）

発生が問題となったが、育苗時のアブラムシ類の吸汁によるウイルス病であることが判明した。育苗時のアブラムシ対策の対応と伴に斑点病、菌核病、萎黄病、ハクサイダニ、ヨトウムシ類など問題になった病害虫の対策を行い防除体系の確立を図った。

4 面積拡大を支援、全国6位の産地へ

昭和51年の事業により産地の規模が3haを超え、新規者や後継者の参入により面積が拡大した。また、昭和52年のミニセルリーの導入により、露地栽培に加えて施設栽培技術が確立し、12月～5月までの長期間の販売に繋がった。現在では、「コーネル619」6.4ha、ミニセルリー「トップセラー」2.3haの合計8.7haの面積となり、収量も700tを超える規模の産地になった。

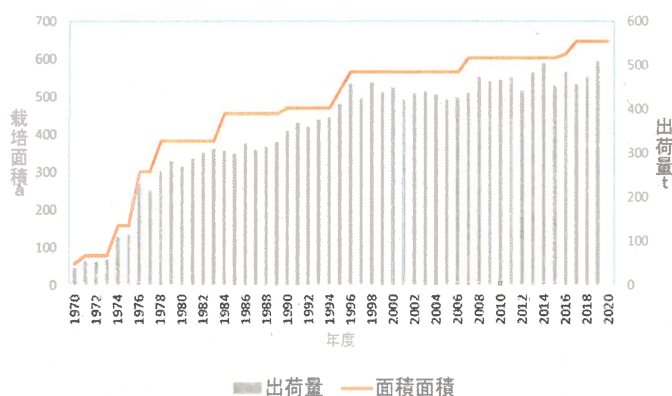


図1「コーネル619」の栽培面積と出荷量の推移

●今後の普及活動の課題

50年の歴史の中で、産地として様々な面で改良・進化をしてきており、これからも産地として発展していくには、次世代の担い手育成が課題である。そのため、基本技術の励行や省力化技術などの導入による技術指導を行い、規模拡大を支援し、農家所得の向上を図る。